



⑥ ショウガを加害する病害その1 <栽培期間中に発生する病害>

1. いもち病

特徴

葉身、葉鞘、塊茎に発生する。**イネいもち病菌とは異なる。**

病原菌は土壌中に埋もれた塊茎には感染せず、**地表面に露出した塊茎**の鞘葉や節で病斑がみられる。

主な伝染源はしょうがほ場の周辺にあるみょうがのいもち病病斑で、その病斑上に形成された分生子が第1次伝染源と考えられる。

対策

- (1) **本病に感染したみょうがが伝染源**となるので、しょうがほ場周辺の畦畔、林、川岸などに生えているみょうがは、前もって処分する。
- (2) **露出した塊茎に感染する**ので、特に、**9月中旬～10月中旬は土寄せを行い、塊茎が露出しないようにする。**
- (3) 防除は、9月中下旬および10月初めの2回、地際部中心に薬剤散布する。



収穫時、塊茎の露出部分で見られるいもち病の菌核



主な伝染源と考えられるみょうが葉のいもち病斑

2. 紋枯病

特徴

主に葉鞘の地際付近で発生する。病斑中心部は茶色く変色後消失し、浅い陥没病斑となる。発病適温は30℃付近で、多湿条件で発生が多い。露地栽培では7月頃から発生が始まり、8月以降に多くなる。

罹病残渣とともに土壌中で越冬し、翌年の伝染源となる。また、罹病した**種塊茎からも伝染**する。

対策

- (1) 必ず無病の種塊茎を使う。
- (2) 根茎腐敗病対策を兼ねた土壌消毒も有効である。
- (3) 連作を行わない。
- (4) 薬剤防除を発生初期から行い、その後は病勢の進展を見て行う。



紋枯病の症状



3.立枯病

特徴

主茎の下位葉から茶色く変色し、上位葉へと進展する。黄褐変は、次第に1次～高次茎に進展し、立枯症状となる。

病原菌は根から侵入するため、病気が進行すると維管束付近が空洞になるのが特徴である。また、病原菌は種根茎の方へも進展する。

主に、**罹病種塊茎で伝搬する**と考えられる。**土壌伝染もするが、通常の土壌消毒を行うと発生は少なくなる。**

罹病塊茎から発病した場合、初発は6月頃であるが、通常9月以降に発病が多くなる。

対策

- (1)必ず無病の種塊茎を使う。維管束部が褐変あるいは空洞化している種塊茎は使用しない。
- (2)植え付け前に土壌消毒を行う。
- (3)発病株の早期発見に努める。発病株はほ場外に持ち出し処分する。
- (4)収穫後の被害残渣は、ほ場外に持ち出し処分する。



下葉から茶色く変色し、上位葉へと進展する



変色した維管束部分

※「こうち農業ネット」より抜粋。「ルーラル電子図書館病害虫診断」参考。